



分類補註李太白詩卷之二十

遊宴

三井家鑒藏

宋澤藏書

遊南陽白水登石激作

襄陽

朝涉白水源暫與人俗疎島嶼佳境色江天涵清虛

日送去海雲心閑遊川魚長歌盡落日乘月歸田廬

蘇賢曰隋州西北一百里曰襄陽縣有春陵故城在縣東漢元帝時春陵侯以其國地卑濕因割蔡陽之白水入唐二鄉為春陵侯邑左思詩長揖歸田廬士贇曰朝涉字祖出恭普業書張良傳曰上日涉之嶽武詩長歌正激列中八條以推

遊南陽清冷泉

惜彼落日暮愛此寒泉清西輝逐流水蕩漾遊子情

空歌望雲月曲盡長松聲

蘇賢曰南都賦耕父揚光於清冷之淵薛綜注清冷水名在南陽西

鄂山士贇曰江淹詩蕩漾不可期阮籍詩湯養焉可辭道家此虛詞有瑯瑤空歌

尋魯城北范居士失道落蒼耳中見范置酒

ぶんるいほちゅうりたいはくし  
分類補註李太白詩

14冊 縦25.5cm 横16.5cm

李白(七〇一～七六二、字は太白)は杜甫と並ぶ盛唐期の代表的詩人で、本書はその詩集の注釈書。掲載する詩の内容で古賦、古風から閨情、哀傷まで二十二類に分類し、宋の楊齊賢が諸家の注を集め、元の蕭士贇が補注した。旅を愛し、酒を好み、月を愛でる。そんな自由で雄大な彼の詩は文人達をも魅了した。

掲出本は至大三年(一三三一〇)建安崇化坊の名書肆、余志安勤有書堂の刊刻によるもので、早印美麗。元時代建安刊本の特徴がよく現れている。漢字の書体では明代刊本の字様から成った「明朝体」がバ

ソコンの文字フォントにもあり、現代人に馴染み深いのが、本書の文字は元朝第一の名筆趙孟頫(一二五四～一三二二)の書体(趙松雪体)が取り入れられ力強く美しい。各

巻頭にある「米沢藏書」の印記は、米沢藩主上杉景勝の重臣で、文武兼備の名将と知られる直江兼統(二五六〇～一六一九)のもの。

李白は遣唐使として渡唐し、玄宗皇帝に仕えていた阿倍仲麻呂(六九八～七七〇)とも親交があった。本書巻二十五には仲麻呂が日本への帰国途中、



巻末の“奥付”

遭難して死去したという誤報を信じて詠んだ「晁卿衡を哭す」の詩がある。近年、中国で発見され、最初の日本人墓誌として話題になった青年遣唐使井真成(六九九～七三四)も李白達と交遊したのでろうか。李白や仲麻呂達遣唐使が交流を深めた当時に思いを馳せて本書を読むのも面白い。

(天理図書館 吉成伸仁)

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>  
 平日(午前9時～午後5時半) 土・日・祝(午前9時～午後4時半)  
 ただし11月3、30日は休み  
 (本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)